



序章

それが見つかったとき、全ては手遅れかと思われた。

まさしく燎原【りようげん】の火のごとく燃え広がる『それ』に対し、人類はなんら有益な対策を持たなかった。

それはもちろん、彼女とて一緒だった。

だが、彼女はそこで膝を折りはしなかった。

折ってはならなかった。

止めねばならない。

伝えなければならぬ。

それを為す力を持つのが最早己だけであると、己に固く戒めねばならない。

多くの人々の手により、彼女は災厄の炎より逃れ、そこに立っていた。

たった一人。

満天の星空の下、己と大地以外は何一つ目に入らぬその場所で、彼女は空を見上げた。

凍りつくような星々のざわめき。

この美しい星の海の下に、たった一人。

故郷も、愛する人々も、沢山の思い出も、何もかも失った。

たった一人。

それでも、生きねばならぬ。戦わねばならぬ。

誰に強制されたわけでもない、そのために今、自分はここに立ったのだ。

そう、自分の意志で多くの人々を犠牲にしてきた、その選択の末に立ったのだ。

星の海にさざめく恒星達よ。

恒星に拠って立つ多くの惑星よ。

惑星の上に立つ生命達よ。

見るがいい。

この、たった一人惨めに立つ姿を。

多くの命を消耗しなければここにいられないほど脆弱なくせに、多くの命を救う燈火【とうか】たらんとする、この哀れでちっぽけな女の姿を。

見上げる夜空に、まるで彼女の代わりに空が涙を流したように、流れ星が一筋横切った。

夜空に架けられた刹那の光の道に導かれるように、彼女は、今日まで逃げて続けてきた道を振り返り、その足跡をかき消すべく一步を踏み出した。

それこそが己の運命と戦うための、彼女の嚆矢【こうし】であったのだ。

第一章・旅の始まり

広大な外宇宙は、百億もの人間の様々な夢を受け止め、その上で更に無限の可能性を見せてつけていた。

そこには、数えきれないほどの夢が広がっていた。

だがその夢を、全ての人が平等に掴めるとは限らない。

宇宙歴539年。

セクターα【アルファ】から未開拓宙域であるζ【ゼータ】方面への深宇宙探査の任を負った、私の所属する銀河連邦セクターα方面軍の任務は退屈極まるものだった。

銀河連邦第22宇宙基地グランド・フロンティア部隊、通称GF隊。

『偉大なる開拓者』の名が冠され、ギャラクシー・フェデレーション【銀河連邦】と同じ略称である我らGF隊の任務の根幹は、銀河連邦勢力の拡大にある。

銀河系という人一人の想像ではとても及ばぬ果てしない宇宙空間の中で、銀河連邦と呼ばれる人々の、国々の、星々の連合体が安定して居住できる宙域の拡大可能性を探ることこそが、GF隊、引いては連邦全体の永遠に終わらぬ課題であった。

各セクターの惑星国家や宇宙基地に配備されたGF隊は、常に宇宙の外側に探査の目を向け、文明を持つ新たな人類に加え、移民や植民が可能な新たな惑星を探し続けている。

宇宙の歴史の中で、人類の滅亡、惑星の消滅などといった事象は、ともすればスカイカー同士の交通事故と同じくらいの頻度で起こるものだ。

だからこそ人類は、本来有機生命体が生存不可能なはずの宇宙空間すらも安定して探索できるほど、科学を発展させてなお、安住の地を求め彷徨っている。

私自身、その理念に強く共感しているし、長い長い銀河連邦の歴史の中で、そのような事象が頻繁に起こっていることを知識として知っているからこそ、連邦軍人に仕官し人類存続のための崇高な任務に心血を注いできたのだ。

だが。

「……」

もう20年以上もの間、セクターαと方面における新たな目標の発見は、為されぬままであった。

セクターと方面は、連邦評議会常任理事星である地球やロークのあるセクターθ【シータ】、テトラジェネスや第3深宇宙基地などを擁するセクターη【イータ】からは遙か遠く離れた、言ってしまうえば宇宙の田舎であった。

αと方面軍の宇宙基地は、数だけが多い。

ハブ基地の役割を果たす大きなものだけでも、私のいる第22宇宙基地に加え、16と18の二つがある。

他のセクターに比べ、明らかに密度が濃すぎるこの布陣は、税金を投入してまで行う深宇宙探査の成果が全く出ないことへの、連邦の焦りの表れでもあった。

セクターβ【ベータ】やセクターγ【イオタ】方面に比べて、歴史的に見ても開拓の速度が鈍い。

その上、銀河連邦の公共の福祉に資する発見がほとんどないαと方面は、連邦予算の金食い虫と呼ばれて久しい。

だからこそ銀河連邦政府は躍起になって大々的に宇宙基地を建設し続けたものの、結果は私が先ほど述べた通り。

基地所属の全軍人が、提出を義務付けられている日報に『特記事項無し』を記入するためのショートカットキーを設定してしまう有様だ。

しかも、基地司令や統合管理AIからすらその件を注意もされないのだから、我が第18宇宙基地所属GF隊の士気は推して知るべし。

週に一度酒を酌み交わす友人である基地メンテナンスチーフは、顔を合わせれば自動ドアの不調を見ただのシールド発生装置の掃除をしたただの、そんな他愛の無い話ばかりする。

もちろん、私も大して変わりはない。

私が艦長を務め、銀河連邦の崇高なる任務を負った我が愛艦である第22宇宙基地所属、GFS S【Galaxy Fedelation Space Ship】・3214F探査戦闘艦は、もう百日近く、武装を全く使っていない。

その百日前の出来事も、哨戒【しようかい】に出ていた訓練の足りない僚艦が宙域のアステロイドベルトに引つ掛かり、進行に邪魔な小惑星を破壊せずに押しつけたという地味なものであった。

『艦長』

そんな百日前の平和極まるスクランブルのことについて思いを馳せていると、軍服の襟元についた通信デバイスから機械音声が発せられた。

『本日の日報提出期限が迫っております。あと二十五分以内にコンソールにつかれることを推奨いたします』

「……」

返事をする気にもならず、私は了承の信号だけを送って通信を切った。

探査戦闘艦GFS S・3214FのOS【オペレーティングシステム】を管掌するAIは、同僚士官の間ではあまり評判が良くない。

年式としてはほぼ最新なのだが、運用に当たって普通のAIでは必要のない気の遣い方をしなければならなかったため評判が微妙だった。

そのせいかどうかは分からないが、私が艦長に赴任して間もなく方面軍でのOSとAIの換装を推奨する指令が出回った。

だがと方面の予算は潤沢な基地建設費用の割にはかなり厳しくされており、艦隊の何人かの艦長に、基地司令からそれとなく今のまま持ちこたえろと圧力がかかった。

評判ほど悪くもないと感じていた私はそのときOS換装を辞退したが、何故かAIがやらんと感謝してきたのが面白かった。

だが、感謝しているならショートカットキー一つで完成する日報作成の代行くらいしてほしいものだと思う。

『AIに日報提出の権限はありませんので』

すると、こちらが通信を切ったにもかかわらず、AIのくせに人の心を読んだかのようにそんな通信を入れてくる。

『日報提出だけでは退屈でしょうから、本部広報の最新トピックスを仕入れておきました。

何でもムーンベースの新設研究所が早くも大きな成果を出したとかで、また当基地の司令の頭が嫉妬で湯気を立てること請け合いですよ』

余計なことを、とも思うが、中央の動静一つですぐに不機嫌になる基地司令のご機嫌をとるためには、その前情報はありがたい。

中央の華やかな話題ばかり載せる本部広報など、田舎の宇宙基地では酒の肴にもならない。

軍令を通して伝えられる情報以外にはここ最近触れていなかったこともあり、ありがたく拝読させていただくでしょう。

この妙にクセがあつて感情表現豊かなAIが嫌いではない自分もいる。

戦艦搭載のAIに個性があることは是非はともかく、優秀で愛嬌のある我が艦のAIの助言に従って、謹んで今日の日報作成の任務に取りかかろう。

暇だということは、平和だということなのだ。

軍人にとって、平和ほど素晴らしいことは他にないのだから。

そう思った瞬間だった。

『第3種スクランブル。第3種スクランブル。スタンバイ中の全GF隊に発艦命令。第3種スクランブル。第3種スクランブル。スタンバイ中の全GF隊に発艦命令』

軽口を叩いていたAIの口調が、一瞬で変化し、百日以上も眠り込んでいた自分の銀河連邦軍人としての血を一瞬で沸き立たせた。

第3種スクランブルとは哨戒宙域内に、通常観測されない物体、或いは熱源が侵入したという事。

つまり、正体不明のトラブルに対し、現場で即応しろとの指示である。

私は即座に最寄りのトラムステーションから戦艦格納庫へと向かう。

途中、艦のクルーから次々に招集呼応の通信がデバイスへと入ってくる。

百日の平和に腐っているかと思いきや、我が艦のクルー達の軍人の血は存外優秀で、冷え切ってはいなかったようだ。

『GFS S・3214 F全クルーの乗艦を確認』

艦橋の艦長席に着くと、所属クルー全員の配置完了信号がコンソールに表示される。

「フライトシステム、オールグリーン」

「発艦シーケンス、スタンバイ」

「僚艦とのオペレーティングリンク、正常」

「ガイドビーコン射出確認。発艦コースとマーク、指定されました。艦長」

艦橋に集結するクルー達からの伝達事項を一つ一つ確認し、AIがそれを追認。

クルーの座るシートの発艦ショック対応シグナルが全てグリーンなのを認めてから、私は制帽を目深に被り直し、発艦を許可する。

『GFS S・3214 F、第22宇宙基地を発艦します』

回数こそ少ないが、既に耳に馴染んだ発艦シークエンスを締めくくるAIの宣言を聞きながら、私は心のどこかで、これで週末のメンテナンスチーフとの話の種が増える、などと悠長に構えていた。

私の許可に合わせてクルーとAIの共同作業により、GFS S・3214 Fの旧式な反物質エンジンが宇宙に新たな蒼い光の尾を生み出した。

その光の尾はきつと、この退屈な第22宇宙基地にすぐ戻ってくるようになる。

そんないつもの宇宙の風景を、まるで神の目を持っているかのように、私は夢想していた。

思えばクルー達の顔つきも、緊張感に欠けてはいなかっただろうか。

いずれにせよ、このとき既に、暇で退屈な宇宙基地での私の生活は、終わりを告げていたのである。

船籍不明艦の攻撃により僚艦の反応がロスト。

その信じ難い報告が艦橋を駆け巡ってなお、私達には動揺する暇も無かった。

「船籍不明艦3隻、未だにコールに応えません！ 識別信号も捕捉不能！ 熱源確認！ フェイズキャノンです！ 後部シールド展開！」

「船籍不明艦3隻のロックオンを受けています！ 飛翔体複数発射！ でもこの速度、陽子魚雷とは思えない……回避不能、回避不能です！ 嘘でしょ!？」

「飛翔体着弾4秒前！ 対ショック！ 対し……ああつ！」

体験したことのない衝撃が艦を襲い、私もクルー達も、シートのエマーゲンシーベルトが肩に激しく食い込み痛みで咳き込む。

『左舷後方シールドに敵キャノン及び不明飛翔体被弾。シールド効率32%低下。外壁損傷6%！ そんなバカな!!』

たった一撃の被弾でシールド効率が三割以上落ちるなど、およそ連邦の常識的な兵器では

考えられない事態である。

僚艦がロストし援護が期待できない上に、どうやら正体不明艦は三隻とも戦闘専門艦のようだ。

深宇宙探査のための探査戦闘艦であるこの艦と比べ、運動性能も武装の量も質も何もかもが段違いに高い。

AIの具申を待つことなく、私の手は既に、コンソールに総員退艦指示を入力していた。

『総員退艦命令を確認！ 航行制御権限を当AIに移行！ 全クルーは速やかに緊急避難ポッドで退艦して下さい！ 全クルーは速やかに緊急避難ポッドで退艦して下さい！ 全クルーは速やかに緊急避難ポッドで退艦して下さい！』

繰り返される退艦命令警報と、正体不明艦による再びのロックオン警報が同時に鳴りだす。信号は実弾兵器と思われる飛翔体だろう。

だが連邦の標準装備である陽子魚雷とは比べ物にならないほどの速度と威力と誘導性能を持つ謎の兵器に狙われたままでは、艦から射出されたポッドが攻撃に巻き込まれかねない。

私は動揺に震える手を必死で動かし、もうどれほど昔かも分からぬ士官学校時代に習得したマニュアル兵装駆動プログラムを起動する。

『兵装駆動コード受諾！ 陽子機雷射出、3、2、1、射出！』

敵実弾兵器の攻撃アルゴリズムを少しでも乱すために、攻撃性能のある機雷を射出する。

これで敵実弾兵器や敵艦が触雷すれば御の字。

コンマ以下秒でも稼げれば、それだけでもクルー達の脱出成功率が高まる。

AIによる緊急避難シークエンスでは絶対に出て来ない人間特有の無駄な足掻きと言う奴だが、

『全ポッド射出確認！ 亜空間ワープホール起動！ 全クルーの退艦を確認！』

AIの報告が自分の判断が正しかったことを確信させてくれた。

脱出ポッドの緊急避難信号がワープアウト最寄りの宇宙基地に捕捉されたことを知らせるシグナルがスクリーンに映し出された。

だが、それに安堵している暇はない。

私は続いて、緊急ワープドライブの起動を指示した。

GF隊の戦闘艦艇もAIも、軍事機密の塊である。

間違っても、船籍不明艦に拿捕【だほ】されるようなことがあってはならないのだ。

『了解、ワープドライブ起動！』

AIが連邦軍法と私の行動に齟齬が無いことを確認し、座標未確定の緊急ワープドライブを起動する。

『コース270、マーク0、正体不明艦のワープドライブ始動を確認。当艦より高出力です。このままではワープアウト前に追いつかれます』

敵兵装の陣容から、敵艦のエンジンがこちらの出力を上回っていることは予測していた。

私は落ち着いて新たなコースとマークを入力する。

『コース120、マーク40。指定赤色巨星を確認。ですがスイングバイ加速を利用しても、正体不明艦の出力が当艦を上回ると推測します。攻撃以外の要因による事故の可能性も否定できません。艦長のポッドでの脱出と、当艦のセルフデストラクション【自沈】プロトコルの実行を具申致します。副長、機関長のコードは退艦直前に受諾しておきました』

AIの癖に、艦長命令に一度逆らうとは生意気だ。

だが、正体不明艦の武装諸元が不明な現状では、セルフデストラクションプロトコルではトラクタービームによって残骸を鹵獲【ろかく】されてしまう可能性が否定できない。

もっと大きな赤色超巨星ならその判断もありだったかもしれないが、指定座標の惑星の引力や伸縮比は、連邦の一般的なトラクタービームでも対応できるものと判断した。

最悪のときは、最悪の選択をすればよい。

今はただ、足掻く。

『本当にいいんですね』

やむを得ない。

人間のような確認の仕方をするAIに、つい感情をこめて応えてしまったのは、気の迷いだろうか。

『…：了解。航路を指定赤色巨星衛星軌道に変更。重力波を捕捉、スイングバイ実行、ワーブドライブ最大出力、艦長、対ショック姿勢を…：』

言われなくても対ショック姿勢はとづくに取っている。

頼む、なんとかなってくれ。

私は今、神に祈ったのだろうか。こんな宇宙の果てに到達しても、人類がすぎるのは結局得体の知れぬ『神』なのか。

どことなく人間のような決意をにじませたAIの報告音を聞きながら、柄にもない神頼みをしていたそのときだった。

『かかかかかかかかかんちよおおおおお！？』

今まで聞いたことの無いAIの『悲鳴』とも呼べる音声耳を打ち、恐怖に心臓が縮みあがるとともに思わず顔を上げると、艦長席のコンソールに、明らかに異常な数値が表示されているのが視界に飛び込んできた。

『赤色巨星の重力波、引力、ワーブドライブ、正体不明艦兵装、該当エネルギー無し！エネルギー発生源不明！ 何かに引っ張られて…：亜空間の歪曲が…：…！』

その瞬間、激しく艦が揺らぎ、艦内の重力に異常が生ずる。

『計測不能！アウトポイント不明！ドライブオーバーロ…：』

聞こえていたのはそこまでだった。

艦内の重力調整が異常をきたし、コンソールの数値に見入っていた私の体がエマージェン

シーベルトの中で浮き上がる。

全身が有り得ないGを受けて容赦なくシートに叩きつけられて肺から空気が絞り出され、その瞬間、私は最悪の事態を覚悟することすらできず、意識を失った。

※

宇宙の星と星の間の空間には、暗黒物質と呼ばれる人の目には不可視の物質が満ちているという。

現代に至るまでその観測と存在の証明は為されていないが、夢から覚める瞬間の暗闇は、宇宙の闇に似ていると思うことがときどきある。

夢と現実の狭間にあつて、意識として知覚できるその闇の中に、己が生きているという意識の白い星のまたたきが光り、私はゆっくりと目を開き……。

「おはようございます！！ バイタルは取れていましたが、覚醒が遅かったので心配しました！」

私は、この世ならざるものを見た。

「そんなに驚愕の顔をして……どうしたんですか？」

どうしたもこうしたも、目を開けてすぐにこんなものが視界に満ちていたら、驚くなという方が無理だ。

「はっ、まさか体に異常が！？ 外傷ですか！？ 内臓ですか！？ 緊急オペですか！？ かんちよおおおお！！」

私自身は、ちよつと頭痛がするくらいでさしたる異常はない。

だが、今視界を制圧しているものの顔が怖い。目が怖い。いやなんかもう全体的に怖い。「うっ……そんなに強く主張しなくてもいいじゃないですか……ヒドイですう……」

目を覚ました途端に視界いっぱいに広がった曰く言い難い難い造形のナニモノカの正体について思い出すのに、朦朧とした頭ではしばらく時間がかかった。

そんな私の反応を察してか、全体的に怖いナニモノカは唐突に自己紹介を始めた。

「忘れちゃったんですか！？ 僕はこの艦のオペレーションシステムのコロですよ！！ 艦長とは、いわば運命共同体と言っても過言ではないのに……！ 怖いとか、そんな怯えたような顔をしなくてもっ！」

妙にねつとりとした、くどいくせになめらかな音声聞きながら、私はようやくやく目の前の全体的に怖い謎物体の正体を思い出した。

連邦航空艦標準OS、OCAI-880-56型の、遭難対応システムの駆動素体だ。

銀河連邦の航空艦が不慮の事故で遭難した場合、概ね艦長かそれに準ずる責任者が最後まで艦に残って航行を維持しているケースが多い。

いざ遭難した場合、艦に残ったクルーのメンタル面を補佐するために、OSが駆動素体、つまりロボットを出して、クルーと言葉によるやり取りを行わせる。

遭難時、孤独による精神損耗は常人が思うより遥かに悪影響が大きい。

そんな折、ロボットであろうがなんであろうが、肉体を持って会話ができる相手がいるだけで、人間が正常に近いメンタルを保持できる確率が段違いに高まるのだ。

実際にOCAI-880.56型のマニュアル映像で、一度だけこの姿を見たことがあった。見たことはあったが……。

「それに見慣れると、キモかわいいって巷で評判なんですからね！」

実際に立体物として目の前に現れると、この見た目はもうちよつとなんとかならなかったのだろうかと思わざるを得ない。

角が果てしなく曖昧で、大人が微妙に抱えきれ無さそうな半端な大きさのボディ。

無理矢理機能を割り当てたとしか思えない地球の動物の耳を模したデバイス。

果ては、恐らく目と鼻と口を模しているのに、それ以外の造形のせいで顔に見えない逆シミュラクラ現象を起こしかねない圧力の強い顔面。

これがキモかわいいなどという加減な評判を立てるのは、一体どこの方面軍だ。

「……艦長、何かまたヒドイこと考えてませんか？」

だが、この妙に人の心を読んだようなことを言うのは、間違いなくこの艦のAIの特徴だ。

駆動素体になるとこんな面倒なことになるのか、とうんざりしつつ、現況を全く把握できていないのに不思議と気持ちが落ち着いているので、確かにメンタル面を支える効果は靦面のようなのだ。

圧力が強く見ているだけでうるさい顔から目を逸らし、艦の現況と現在位置を尋ねてみた。

「ごまかしましたね、艦長……」

やはり、あのととき司令の圧力に屈せずOSまるごと換装しておいた方がよかつただろうか。

コロ、と名乗った駆動素体は押し出しの強い瞳をグリーンに光らせつつ、何かを演算しているようだった。

その光り方がまた不気味なのだが、それを言うより更に面倒な反応を起こしそうなのでぐつとこらえる。

「申し上げにくいのですが、当艦の現在位置は不明です」

そしてコロの演算の結果は、あまりありがたくないものだった。

「当艦は大気を持つゴルティロックS型惑星に不時着しています。艦長がお休みの間に計測した一パーセク内の星系配置は、僕のデータベースにある銀河連邦勢力圏の宙図のいずれの場所とも一致しません」

言葉選びがいちいち鼻につくが、緊急ワープドライブはワープアウトポイントを指定できないことがままある。

OSが古いと大気の内側の天候次第で星図を正確に把握できないことも稀にあると聞くので、現在位置が不明な点は後回しにする。

とりあえず、この惑星の引力を振り切って宇宙に出られるのかを尋ねると、

「現在艦体のダメージレベルをチェック中ですが、外部センサーが動作していませんので、把握にかかる時間は不明です」

少しの損傷が重大な事故を引き起こしかねない宇宙航行に置いて、周囲や艦隊外部のステータスを把握できないのはかなり問題がある。

それこそシールド効率のデータが得られないのだから、デブリと衝突する通常航行すら安心して行えない。

そんなことを考えていると、足元から突然すすり泣くような声が湧き上がってきた。

「……一体……何があったんでしょう……僕達、地球に帰れるんでしょうか……」

泣き言と不安を音声に出して表明するコロ。

お前がそんな動揺を口に出してどうするんだ、乗員メンタル保持のための駆動素体じゃないのか、と呆れなくなった。

設計者は一体何を考えて涙を流す機能など与えたのか。

コロの目から流れている水のため息を吐くが、こうして弱っている様子のコロを見ると不思議と自分がしつかりしなくては、という気持ちになってくる。

なるほど、メンタル保持というのはただ対象を庇護すればいいものでもないようだ。

何だか腹立たしい。

OSであるコロの分析が広範囲に及ばないとすると、取れる選択肢は多くない。

私自らが艦の外から、付近の様子を見まわるしかあるまい。

「えっ!? 艦の外に出るんですか!? 危険ですよ!」

コロに言われるまでもなく、危険は百も承知だ。

だが外部センサーが動いていないのなら、予備パーツを出して人の手で換装するしかない。そして現在この艦にそれができる存在は、私を於いて他にはいないのだ。

もちろんコロがやってくれる、というのなら喜んでその任を与えたいが……。

「仕方ないですね。僕は艦から出られませんし、外の大気は窒素を主成分としたE【地球】タイプです。有害な電磁波や宇宙線、放射線は確認されませんでしたので、どうかお気を付けて」

やる気はないし、やれないようだ。

せめて外部の映像をスクリーンに、と命令すれば、砂と岩の平原がひたすら続くだけの目視では全く詳細分析が不可能な様子が見て取れただけだった。

「そ、それは僕のせいじゃありませんよお」

まあ、確かにそうなのだが。

「艦のハードウェアはともかく、僕依存の機能は平常通りのパフォーマンスを維持していません。艦長の襟のデバイスを通して出来得る限りのサポートを行います。……本当に、気を付けて下さいね」

不安になるから、頼むからそんな念を押すような言い方はやめてほしい。

私は、あの宇宙基地に所属している限り使うことの無いと思っていた、艦長席の足元に配備されたフェイズガンを腰に装着しつつ、艦の昇降口へと向かう。

そこで見たものは……。

『あれ、開いてる』

首元のデバイスからコロの間抜けな声が漏れる。

私の目の前の艦のハッチは、ワープアウトか墜落かいずれかの衝撃で、既に半開きになっていたのだ。

外はかなり風が強く、半開きの隙間から砂埃がもの凄い勢いで吹きこんできている。

『ただだ、大丈夫です大丈夫です！ 艦長の体に有害な物質、ウイルス、細菌などは一切確認できません！ 砂埃でちよっとお掃除が大変なくらいです！ ホントです！』

何故だろう、姿が見えないのに、コロが自分からあの大きな目を逸らしている様子が手に取るように分かった。

ワープ直前に正体不明艦の攻撃を受けた左舷後方は、スラスタの一部吹き飛んでいた。

これでは惑星の重力を振り切る速度が出せるかどうかすら怪しい。

艦のコンテナには万が一の事態に備えた予備パーツが積まれているが、ここまで大がかりな修理をコロのサポートがあるとはいえ、一人でできるだろうか。

それに、外部センサーの状態は地上からは確認できない。

艦体上部のセンサーを見るには艦の外壁をよじ登らねばならないが、外部センサーはそれなりに大きなパーツだ。

この星の重力は1G前後のようで、センサーのパーツを抱えたままこの強風の中、艦の上で作業するのはかなり不安だ。

考えれば考えるほど、悪材料しか湧いてこない。

『大丈夫です艦長！ 僕はこの艦にまつわる全ての機能のマニュアルを持っています！』

申し出はありがたいが、説明書を読むだけで航宙艦が修理できればエンジニアという職はいらぬのだ。

これは諦めて、遭難信号を亜空間ワープに乗せて救援を待った方が良いのでは……そんな考えが湧く。

だが、すぐに不時着地点の周囲を見回して、コロに飲用可能な水の存在を尋ねた。

『艦に搭載されている飲料水は、健康維持のために必要量を計算すると、三ヶ月分です』
この惑星での補給は可能かという問いに対しては、

『外部センサーが故障しているので不明です。今は足で稼ぐ他ありませんね!』

お前の足はどこだ、とつい問い詰めたくなるが、今は見つけられないから歩いて探せ、ということだ。

考えれば考えるほど絶望的だ。

三ヶ月分の水、というのは、宇宙で遭難した場合には全くもって安心できる量ではない。食糧も決して備蓄は多くない。

少なくとも目に見える範囲に水は全く存在しないし、この星の雨に有害物質が含まれていない保証はどこにもない。

『仰る通りですね……最悪僕だけは太陽エネルギーでなんとかありますけど……』
やっぱりOSもAIも換装しておくべきだった。

そんな苛立ちをなんとか抑え、何か手に届く範囲に有用なものが無いか、詮無く探そうとしたときだった。

視界の端に、この荒涼とした荒れ地に似合わぬ鮮やかな光を捉えた。

コロもそれに気づいたのか、問いかけてくる。

『艦長？ 危険ですよ？ センサーが正常に作動しない現時点で、迂闊にこの星の物質に触れない方が……』

ハッチが半開きのままだったのに、それを言っても今更だ。

吹き荒れる風を突き抜けて地表に届く光を照らし返して光るそれは、一見すると石か鉱物に見えた。

奇妙なことに、明らかに自然のものとは思えない模様のようなものが刻印されている。

人工物なのだろうか。

『艦長！ 危険です！ 未知の巨大宇宙生物の疑似餌みたいなものだったらどうするんですか！ ばくってやられちゃいますよ！ 綺麗なモノには危険がイッパイなんですよ!』

だったら外に聞こえる大音量でそんなに喚かないでもらいたい。

少なくとも周囲に有機生命体の気配は存在しないし、連邦の記録にあつた岩石生命体にはそもそも有機物を捕食する性質が無い。

というか、今見ている前で一際強い風が吹き、風にあおられた石が足下で転がった。

少なくとも巨大宇宙生物の一部ではなさそうだし、連邦軍人の軍服に標準搭載されているガイガーカウンターも反応しないので、手袋越しに触れば大きな害はなさそうだ。

『何でしょう……人工物にも見えますね。刻まれているのは、惑星ロックの紋章法術を模した刻印にも見えますが……』

偶然にも、私もコロと同じ印象を抱いた。

だが、既に科学分野の一角として連邦全体に広く普及している紋章科学が用いるそれとは、どこか違っていても思える。

専門分野ではないのでどこが違うのかはつきり区別できないのがもどかしいが、それでもこの謎の石は私に僅かな希望を抱かせた。

刻まれた紋様の正体がなんであれ、この石に刻印した何者かが存在するはずである。

それがこの星の存在なのか、この星を訪れた存在なのかは分からないが、自分とコロ以外の人類の痕跡がそう遠くない場所にあるかもしれない。

希望を抱ければ、慣れない艦体メンテナンスへの意欲も湧いてくる。

一人では時間もかかるだろうが、何もしないよりはマシだ。

そう考え、とりあえず倉庫のパーツチェックとこの石の分析のため、一度艦内に戻ろうとしたそのときだった。

『艦長！ 何かが当艦に向けて接近してきます！』

コロの警告で、私はたどたどしい手つきで腰のフェイズガンを引きぬき身を低くし、身構えた。

警告は明らかに緊張を含んでいた。

身構えてすぐに、大きな何かが移動していると思しき砂煙が、そう遠くない場所からこちらに向かって近づいてくるのに気づいた。

私は思わず舌打ちする。

どう見ても、有機的な生物の動きで、しかも妙に大きい。

コロの言う、未知の巨大宇宙生物としか言いようのないものだ。

フェイズガンで対応するべきか、それとも艦にこもってやりすごすべきか、私は一瞬判断に迷うが、

『ヒト……？』

コロの一言が、私の目を限界まで光らせた。

『艦長！ ヒトです！ ヒト型の生命体が、あの砂煙に追われて接近しています！ ひええ

っ、今砂煙の内部を捉えました！ 巨大なカニです！ どでかいカニです！ 茹でたらGF隊全員分のお鍋作ってお味噌がいっぱい取れそうなどんでもないカニです！ って艦長！？』

私は気が付けば、砂煙を巻き上げる巨大蟹に向かって走り出していた。

既に私の肉眼でも、その人物の姿は見えていた。

コロが言うヒト型の生命体は、見たことのない衣類を纏う、明らかに文明を持った人類だ。

細い体と、美しい金色の長い髪。

連邦に最も多く存在するヒューマンタイプの人間と全く変わりない、人間の女性だ。

『か、艦長！？ まさかそのフェイズガンであのカニをやっつけるつもりですか！？ あの女性を助けるつもりですか！？ ダメですよ！ 未開惑星保護条約違反になります！』

そんなことは分かっている。

分かった上で、もはやそんなことを言っていられる状況ではない。

向こうが、こちらに気づいたのだ。

女性は明確にこちらに進路を変え、迫ってくる。

明らかに助けを求めている。

民間人に救援を求める意思を見せられた連邦軍人の行動は、一つしかない。

『……そうですよね、向こうがこっちに向かって来てるんだから、今更どうしようもないですよね』

コロもすぐに状況を察して諦めたようだ。

私は地を蹴って、向かって来る女性の傍らを一気に駆け抜けた。

「えっ……」

鈴の音のようなたおやかな動揺の音が、一瞬耳を打った。

私はふりむかず、迫りくる巨大な蟹に向かって躊躇うことなくフェイズガンのトリガーを引き絞る。

『命中しました！ ですが標的、未だ活動を停止していません！』

コロの分析を待たずとも分かっていた。

巨大生物の見るからに頑丈な甲殻に、フェイズガンは穴を穿った。

だが、それはこの巨大な生き物の活動を止めるには至らず、むしろ痛みによる怒りを増幅させただけのようだ。

『ひいっ！！』

振りかぶられた岩の塊のようなハサミを必死に回避すると、何故か私ではなくコロが悲鳴を上げる。

構わず二度、三度とフェイズガンを放つが、やはり蟹に致命傷を与えるには至らない。

同じ場所に何度も撃ちこめば体を貫けるか、そう考えて連射を試みるが、蟹は思いのほか機敏な動作で、ハサミの殻を使いフェイズガンの光の弾道を逸らしてしまう。

結果、甲殻は抉られるがダメージが通っている様子が全く感じられない。

『また来たあああ！ 艦長よけてええええ！』

コロの悲鳴に顔を顰めながら、私はそれまで見えていなかった蟹の口から放射される異臭のする水流を危ういところで回避する。

あれを浴びるのは、出来れば御免蒙りたい。

必死で距離を取ろうとするが、蟹もこちらを獲物と定めたか全く逃がしてくれる気配はなかった。

フェイズガンでダメージが通らないとは誤算だった。

せめて今のうちに、女性には艦内に退避してもらおうか、もっと遠くに逃げてもらおうかしな

ければならない。

言葉が通じるかどうか分からないが、とにかくあの女性に警告を發そうと口を開けたそのときだった。

私の目の前を、疾風の如き『何か』が通り抜けた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオっ！！」

その悲鳴が、目の前の蟹から發せられたと気付くまで、数瞬を要した。

派手に体液が噴き上がり、執拗に私を狙っていたハサミが激しく砂を巻き上げて地面に落ちる。

何が起こったのか分からなかった。あれほどフェイスガンで撃つてもどうにもならなかったのに。

「下がって！ もう一度やるから！！」

その声は、私の耳に意味のある言葉として届いた。

無我夢中でその言葉に従い、残った蟹のハサミの攻撃範囲から逃れようとした私の耳に、それは聞こえた。

「煌星よ……彼の者を導く燈火となれ！！」

そのとき未知の惑星の大気を埋め尽くした虹色の光は、紋章が刻まれたあの鉱物と同じ色をしていた。

『艦長！』

コロの鋭い声が、私の注意を女性の方へと向かせる。

毅然とした表情でこちらを見る女性の手には、私が先ほど拾った鉱物が握られていた。

私が見ている前で、鉱物が空中に溶け、代わりに奇妙な円盤状の物体が出現し、すぐに消滅する。

『あれは……人型の、生命体……？』

A Iもまた、呆然、という感覚を持っているのだろうか。

円盤が消滅すると同時に女性の傍らには、先ほどまで絶対にその場にいなかったはずの『人間』が出現していた。

それも、二人。

「行くぞっ！！」

若い男性の声だ。

砂と岩の荒野に、突然現れた蒼い髪の若い男は、疾風としか言いようのない速度で私の傍らを駆け抜け、美しい剣を振りかざし、巨大な蟹へと斬りかかる。

そう、剣だ。

降って沸いた前時代的な兵装の若い剣士がその太刀を振るうと、次々に巨大蟹の装甲が剥がされてゆく。

私は、フェイズガンを構えることすら忘れ、その様子に呆然と見ているしかなかった。
「準備できたわ！ 下がらなさい！！」

新たなその声の主は、美しく長い髪と印象的な長い耳を持った長身の女性だった。
己の身長よりも長い杖のようなものを優雅な動作で振るうと、その先端をカニに向けて。
警告と同時に若い剣士が、人間とは思えぬ跳躍力で大きく距離を取ったその瞬間だった。

「ちよつと痛いわよ！！」

耳の長い女性の声とともに、杖の先端が青白くスパークし、蟹が巨大な雷の球体に閉じ込められたのだ。

辺り一面に生き物が焦げる臭いが徐々に立ち込め、蟹が雷の中でもがく。

だが、女性の力は蟹を決して逃がさなかった。

やがて岩山の如き蟹は力尽き、地響きとともにその体を地面に落とし、二度と動かなくなる。

「なんだ、見かけ倒しもいいところね」

雷を発生させた女性は蟹の絶命を確認すると、もはや興味を失ったようにそっぽを向き、若い剣士も安堵した表情を見せながら剣を腰の鞘に仕舞う。

私は、ただただ驚愕していることしかできなかった。

目の前で一体何が起こったのか分からない。

最初は、一人の女性がいるだけだった。

金色の長い髪を持った、鈴の音のような美しい声をした女性だ。

だが、自分が蟹相手に不利な戦いを強いられている間に、どこからともなく謎の剣士と雷の女性が現れた。

恐らく、あの雷は紋章術だ。

銀河連邦の軍人にも、紋章術に依存した戦闘術を会得した者は多い。

だが耳の長い女性の雷の威力は、私を知る連邦軍所属術士の誰とも比較にならないほどの威力を誇っていた。

「危ないところでしたね、大丈夫でしたか」

呆然とする私にかけられた剣士の青年の声は、若いが芯の一本通った力強さを感じさせるものだった。

だが、事態に驚いている私は、若い彼の言葉に反応できない。

と、そのときだった。

「やっぱり……あの石だけで、二人は、キツかったわ……」

最初に蟹から逃げていた金髪の女性が、震える声でそう呟いた。
私を含めた三人がその声に顔を上げると、

「ちよつと、ごめん……あたし、もたない、かも……」

そして膝を突き、崩れ落ちてしまう。

耳の長い術士の女性は、慌てた様子もなく金髪の女性の傍らに歩み寄ると、目を閉じた顔の上に手をかざす。

「……大丈夫よ。眠っているだけ。外傷も見当たらないわ」

「そうですか、よかった。突然倒れたから少し驚きました」

術士の女性の言葉に、剣士の青年が安堵の表情を見せる。

『か、かんちよー……僕、何が起こったかよく分からないんですが……』

コロにそんなことを言われたって、私にも分からない。

すると、そんな私とコロの動揺を見透かしたように、術士の女性が美しい顔に蠱惑的な笑みを浮かべて、言った。

「あなたが、あの船の責任者なのね？」

そう言って彼女の杖が指し示す先には、私達のGFSS3214F探査戦闘艦があった。

「ならば、とりあえずこのお嬢ちゃんを運び込ませてもらうわ。こんな吹きっさらしにいや、髪の毛が砂でざらざらになっちゃうし……なにより」

耳の長い女性は、金髪の女性と、若い剣士と、そして私を順繰りに見た。

「自己紹介は、落ち着ける場所でやるべきだと思わない？」

広大な外宇宙は、百億もの人間の様々な夢を受け止め、その上で更に無限の可能性を見せてつけていた。

私は今、つい数時間前まで想像だにしていなかったような、無限の可能性の一端に触れているのかもしれない。

その予感に突き動かされ、首元で未開惑星保護条約が雷がおへそがあわわわわと騒ぐコロをとりあえず宥めながら、私は星の海の片隅で出会った最初の『仲間』達と共に、GFSS3214F艦内へと戻ったのだった。